

幼児の主体的な活動と保育者の援助についての研究 自己課題の生成の視点から

著者	山本 淳子
学位名	博士（教育学）
学位授与機関	大阪総合保育大学大学院
学位授与年度	2017
学位授与番号	甲第12号
URL	http://doi.org/10.15043/00000923



博士学位請求論文の概要及び審査結果の要旨

氏名	山本 淳子
学位の種類	博士（教育学）
学位番号	甲第 12 号
学位授与の要件	大阪総合保育大学学位規程第 13 条
学位授与の日付	平成 30 年 3 月 18 日
学位論文題目	幼児の主体的な活動と保育者の援助についての研究 — 自己課題の生成の視点から —
論文審査委員	主査 玉置 哲淳（大阪総合保育大学教授・博士（教育学）） 副査 山崎 高哉（大阪総合保育大学教授・博士（教育学）） 副査 名須川 知子（兵庫教育大学大学院教授・学術博士・ (教育学)）

〔1〕論文の概要

幼稚園における教育課程編成の原理として提起されてきた「主体的な活動」の概念に新たな解釈を提起し、あわせて、「主体的な活動」への保育者の関与のあり方を検討することを論者は目的としている。このため、次の 5 つの課題について検討している。1) 主体的な活動が純粹自己と関係的自己の両面から理解可能であることを提案しつつ、2) 自己課題生成が主体的活動にとって不可欠であるとした。3) また、自己課題生成の事例検討から 5 類型を見出している。4) さらに、保育者の関与では間接的関与から直接的関与にいたる援助の 7 類型を提案した。5) 3) と 4) の関係を検討して、自己課題生成の発展のために間接的及び直接的関わりの双方が有効であると指摘している。以上のことから、自己課題の生成・発展のための保育者の働きかけは「待つ・見守る」などの間接的な関わりのみならず、直接的な関わりによって自己課題の活動が発生・発展・展開するとしている。よって、主体的活動を自己課題生成の観点から理解することで、保育者の援助の多様性や教育課程の編成・指導方法など幼稚園教育の方向性を提起する試金石となる提案をしている。

本論文の構成は、以下のとおりである。

第1章 子どもの主体性をめぐる幼児教育の実践上の課題
第2章 幼児の主体的活動における二つの自己の様相—第1調査—
第3章 幼児の活動における自己課題の生成の様相—第2調査—
第4章 幼児の自己課題の生成と保育者の援助の検討—第3調査—
第5章 全体的考察 幼稚園の活動における子どもの自己の課題の生成論の意義と展望

以下に各章の概要について述べる。

第1章「子どもの主体性をめぐる幼児教育の実践上の課題」では1989（平成元）年幼稚園教育要領以降の「環境を通して行う教育」における保育実践上の保育者の保育方法の揺れがあることを指摘した。というのは、64年指針から子ども中心主義への転換は保育者の意図性を否定するものではなく、幼児の主体的な活動と保育者指導性のバランスが必要であったことを指摘している。そこで、このバランス論の解決のために主体的活動をどう理解するのかを検討する必要が提起された。このために、本論は第1調査（主体的活動における自己の相の検討）・第2調査（主体的活動における自己課題の生成の様相）、さらには第3調査（自己課題に応じた援助のタイプ）の3つの調査を踏まえ、主体的活動の理解と援助のタイプを抽出することを課題として提示している。これは、主体的活動を保育に位置づけるための必要な整理であり、本論はこれを基本課題としている。特に、子どもが行う自己課題の生成に着目していることは着目に値するものである。このために以下の章で検討を行っている。

第2章では、まず、幼稚園教育要領で示された「主体性」、「主体的」及び「主体」についての意味の理解するために、平成元年以降、研究者によって示された「主体性」、「主体的」、「主体」について示された概念等の文言をコード化してタイプ分けを試みた。その結果、幼児の「主体性」・「主体的」・「主体」の概念は、「自己」の要素と「関係」の要素、及び「発達」の概念の要素を示していた。ここでは幼児の主体性は自分の欲求や内面の求めに応じて、自分を十分に発揮する面{純粹自己}と、社会生活を営むにあたっての主体性(社会的自己)との両義性が示された。つまり、保育者は幼児の主体性の概念として、「自己」と「関係」を捉えなければならないことを論者は提起した。「関係」の要素では、まわりとの関係において、「独自の自己」の側面での関わりと「私たちとして生きる」と示される社会的な位置付けの両面が主体性の概念としている。

そこで、子どもの「自己」をどのように理解しなければならないのかを検討した。自己概念の二つの相（「純粹自己」と「社会的自己」）を行った。まず、先行研究及び事例観察（第1調査）から「純粹自己」として「自分が自分の主人公になる」「内的要求を持つ自己」「思いに基づいて自ら行動を起こす自己」「発達する自己」の姿が見だし、さらに、「社会的自己」として「他者と共にある自己」「他者へ関心を持つ自己」「他者との交流する自己」「他者とかかわり発達する自己」が想定された。さらに活動においても二つの自己の相が見られるのか、観察事例で検討を行ったところ、純粹自己に関わる子どもの姿は自分なりの面白さ

を感じる活動に打ち込んで取り組む姿であった。社会的自己に因る子どもの姿は保育者や友達等との関係においてみられ、人との関わりによって、さらに活動が広がる、深まる、転換するなどの様子が観察された。また、一斉活動の B 児の事例を検討したところ、社会的自己の割合が 88 パーセントと高く、純粋自己の割合が 12 パーセントと低かった。これは、保育者の意図性が高い活動であったことと友達との関わりの中で社会的自己の割合が高かったことが影響していると考えられた。さらに、C 児の事例では保育者の関わりが全くない活動であったが、社会的自己と純粋自己の割合が、51%と 49%とほぼ半々であった。友達との関わり、砂場の型抜きを成功させようとする遊びの取り組みの姿が見られ、物的、人的環境との関わりが活動を方向付けていた。

第 1 調査から純粋自己から社会的自己への広がり、社会的自己から純粋自己への深まりなど自己の二つの相が行き来しながら活動が展開する様子が捉えられた。以上のことから仮説「幼児の活動では「純粋自己」及び「社会的自己」のいずれかの側面が見られ、それらは周りとの関わりによって反映される」についてはそのどちらも確認することができた。

以上の検証から、子どもの主体性、主体的な活動を理解する場合、「純粋自己」「社会的自己」についてどちらかにのみ偏った理解、もしくは二項対立を想定する概念ではないということ踏まえることの大切さが示唆された。そのうえで、保育者は保育の展開において、子どもの活動が「純粋自己」によるものなのか「社会的自己」によるものなのかを捉え、理解を深めることで発達に寄与するような望ましい援助の方策を考慮する方向性が示された。

第 3 章では保育者が子どもの活動における自己課題の生成をどのように理解するのかを検討している。というのは、どのような主体的活動であれ、幼児は活動における自己の課題を生成していなければ主体的活動となることは難しいと考えられる。しかし、その自己課題の生成は同じものではないと想定し、そのタイプを検討した。すなわち、自己課題の生成のタイプがありそれらが様々に組み合わさって自己課題を生成することを確かめるため第 2 調査を行った。結果として、「自己課題生成」において 5 つのタイプがあることを事例から予備的に抽出した。すなわち、「Ⅰ. やりたいことを見つける」「Ⅱ. 目的めあてがある」「Ⅲ. こんなやり方で活動を遂行する」「Ⅳ. 自分なりのこだわりを持つ行為を生成する」「Ⅴ. 新しい自己課題を生成する」の 5 つのタイプを見出した。

この 5 つを念頭に事例を増やして検討した結果、特徴的な自己課題の生成のタイプとして改めて整理したのが次の 6 つのタイプである。すなわち、〈めあて生成型〉〈欲求生成型〉〈興味関心生成型〉〈遂行生成型〉〈追及生成型〉〈発展生成型〉である。実際にはそれらが複合したタイプが見られるが土台となるのはこれら 6 つである。

以上のことから子どもの活動では自己課題の一つのタイプ、もしくは複数のタイプが組み合わさって、活動の過程を生成しているという事がとらえられ、また、た。園生活における幼児の活動の検討ではいくつかの自己課題のタイプによって活動が展開されていることが捉えられた。また自己課題における「自己」は純粋自己もしくは社会的自己の相での活動の展開がある。これは自ら取り組む活動の姿であり、主体的な活動であるといえよう。つまり、子どもの自己課題の生成の多様性は主体的な活動の多様性として理解すべき

であることがとらえられた。これらを踏まえて、論者は自己課題生成とは「自分の興味・関心や求めに応じて、あるいは目的、めあてやイメージをもって、自ら活動に取り組むこと。活動の発展、転換など一連の活動を生み出すことのプロセスである」と定義することが可能であることを提示している。これは自己課題の生成の多様性をふまえた上で、それぞれの活動の質を問う定義であると位置付けている。こうした自己課題の生成の視点を導入することで主体的活動の構造的な理解が可能となり、保育者の関わりが具体的に検討可能ではないかと推察できる。

そこで、第4章では、保育者の援助のあり方を検討するために第3調査を行った。すなわち、第3章で示された自己課題生成のタイプに、保育者はどのように対応するのかを検討した。このために、観察した幼児の活動における自己課題の生成に対応する保育者の援助のタイプを想定した。すなわち、保育者の援助のタイプに関わる先行研究を踏まえてまず、「子どもの意志が中心」、「保育者の意図性が中心」に大分類し、次に、前者の保育行動として、「関与なし、見守る、受容」の3つ、後者の保育行動として「示唆、誘導、主導」の3つを想定した。さらに、この二つの中間に「協同」を想定した。結果、7つの保育行動・関わりを提案した。

このカテゴリーを使って検討した結果、観察園の事例からは全てのタイプが見られ、中でも子どもの意志が中心の援助、次いで協同する援助、最後に保育者の意図性が大きい援助の順で保育者の関わりがなされていた。これは、子どもの主体性・子どもの意思を尊重するという視点から当然の結果であると考えられた。

そこで、自己課題生成のタイプ別保育者の関わりを次の5つに分類した。1つは、〈興味関心生成型〉では、「協同」「保育者の意図性大」の関わりが平均値以上であり、保育者が関わることで興味関心を育てている傾向が見られた。2つに、〈欲求生成型〉は子どもの意志が大きい割合が最も大きく、関与しないことも含めて子どもの欲求が受け入れられる傾向が見られた。3つに、〈めあて生成型〉では「協同」と「保育者の意図性が大」の項目が全体平均以上であり、保育者の関わりが子どものめあて生成に寄与していると推測できた。4つは〈遂行生成型〉では「協同」することで励ましの気持ちを届ける、活動の流れを作る等の「保育者の意図性が大」の直接的なかわりであった。それによって子どもの活動が遂行される姿が見られた。5つは、〈追及生成型〉〈発展生成型〉は「子どもの意志が大」が共に平均値以上を示した。子どもが活動を深めたり広げたりして発展させている場合、保育者は活動の展開を子どもに任せている姿と捉えられた。この5つの理解によって、主体的活動の重要性を指摘するだけでなく、又、子どもの主体的活動を待っているだけでなく、主体的活動への保育者の関わりが多様な方向性が示されており、保育における保育者の関わりが多様性が示され、同時に、保育者の意図性と子どもの意図性の調和とバランスをとる具体的な方向性を示したといえる。

第5章では、この二つの意図性の調和とバランスを保育者の援助の視点からまとめている。保育者の援助は子どもの意図が中心であったり、保育者の意図が中心であったり、それらが同等である場合等、子どもの活動に応じる多様な援助が行われていた。これは子ども

もの活動と保育者の援助の多様な組み合わせにおいて保育が進められていると言えよう。それらを互いに受け入れ合うことで、子どもの活動における自己課題の生成がなされ、活動が展開していく姿が捉えられた。例えば、子どもの意図の大きい「わがまま勝手」な行動を保育者が拒否したならばその行動は遂行されない場合がある。関与しない、又は受け止め、寄り添う場合にはその行動は遂行される。また保育者の意図が大きい保育の場合、「子どもが受容することで活動が遂行される」が、子どもが受容しない活動は遂行されないことも考えられる。よって、子どもの活動における自己課題の生成と保育者の援助の多様なタイプは互いの受け入れ、時には補い合う関係の中で生成発展していくものにとらえうる。主体的な活動を捉える場合、子どもの意志中心の指導、保育者の意図性の高い指導は2項対立的に捉えられたり、バランスのあり方として説明されたりする場合がある。対立でもなくバランスでもない、互いに補いあうような、相補的共生的な関わり・態度が子どもの自己課題を生成する姿を保育者の援助として望ましいのではないだろうか。また逆のイメージは非受容や否定による自己課題の非生成といえるとしている。よって、子どもの自己課題の生成に焦点をあてた保育での関わりが重要なポイントとなると提起している。

以上のことを踏まえて、第5章で次のような結論をまとめている。すなわち、自己課題の生成を見据えた保育者の援助とした論者の仮説「幼児は取り巻く様々な環境とかがわり、自己課題を生成する。幼児の自己課題の生成と保育者の援助は相互に受け入れ合うことで主体的な活動を展開する。幼児の自己課題の生成を意識した、保育者の直接的、間接的あるいはかかわらないことも含む多様な援助は子どもの自己課題の生成に関与する」は支持されたといえる。保育者の特定の関わりがよいか悪いかということではなく、子どもの自己課題の生成につながる保育の関わりが重要であるということになる。

〔2〕 審査結果の要旨

本学大学院児童保育研究科学位（論文博士）審査規則は第12条において次の5つの審査基準を公表している。

- (1) 当該博士学位申請論文が、当該申請者の研究業績を踏まえ、その集大成として認められる内容であること、
- (2) 当該博士学位申請論文の属する研究領域において、独創性が認められること
- (3) 当該博士学位申請論文の属する研究領域において、その水準の引き上げに資するものであると認められること
- (4) 当該博士学位申請論文に、他の領域を含む学際性が認められること
- (5) 本学大学院が授与する博士の学位にふさわしいと認められるものであること。

まず、(1) 当該博士学位申請論文が、当該申請者研究業績を踏まえ、その集大成として認められる内容であることについて。

本論文は、筆者が関心を持ってきた保育内容研究と乳児保育研究を結合したものである。

すなわち、初出は以下のとおりである。

第1章 第1節：山本淳子(2014).「現行の幼稚園教育要領における「主体性」の概念の検討」『大阪キリスト教短期大学紀要 第54集』pp.153-165 を加筆修正

第2章 第1節：山本淳子(2017).「平成期の幼児教育における主体性の概念の検討 - 先行研究の整理から - 」『大阪キリスト教短期大学紀要 第57集』pp.88-108 を加筆修正。

第4章 第1節：山本淳子(2015)「子どもの主体性と保育者の援助のタイプの検討」 pp.247-262 を加筆修正。

山本淳子(2016)「子どもの主体性と保育者の援助のタイプの検討(2) —子どもの活動における保育者の意図と子どもの意志についての一考察—」 pp.257-270 の内容を加筆修正。

本論文は以上のように大学紀要を中心にして年来の筆者の研究の成果の上にさらに発展させたものであると評価でき、筆者の研究の集大成として認められる内容であると評価できる。

(2) 当該博士学位申請論文の属する研究領域において独創性が認められること、

本論文は、子どもの主体性概念・自己概念など哲学的・心理学的理論研究も参照しつつもこれまでの領域区分から考えるとき保育実践に即した総合的な研究として認められる。論者は、保育現場における主体的活動を多様に理解できる可能性を提起しており、保育者と子どもの積極的な関わりの方向を示している。この解釈は自己課題生成の内実をさらに具体的に検証に課題を含んでいるとはいえ、実証的なデータ（主にケース研究）に基づいた新たな実践の方向性を示すパイロット的な研究であるといえる。

(3)の「当該博士学位申請論文の属する研究領域において、その水準の引き上げに資するものであると認められること」について。本論文は、自己課題生成の位置づけをしなすことで保育の構造を直接的提案しており、保育における遊び指導のみならず設定保育の指導にも寄与する論文である。よって、個別の領域のみならず保育内容全般の選択の際にも有用な知見を提示している。又保育方法の視点から保育のさまざまな側面の土台となり保育の質の向上につながるものと認められる、これらからさまざまな保育学研究の水準の引き上げに資すると考えられる。

(4)「当該博士学位申請論文に、他の領域を含む学際性が認められること」では、本論文は子どもの活動をどう解釈し位置づけるかを検討し自己課題生成論を下に新たな保育内容論の検討を行っており結局保育構造の提案となっている。よって、いろいろな保育の領域にわたる提案となっており学際性が高いと認められる。また、研究方法論と視点からいえば、文献研究・統計的处理・質的研究など多様な方法を使った、多面的な研究であり学際的な研究と認められる。

最後に、「(5)本学大学院が授与する博士の学位にふさわしいと認められるものであること」については、本論文が提起している内実は本学の保育を軸とした内容研究・方法研究の土台となる研究であり、本学の博士の学位にふさわしいと認められる。

以上のように、本論文は高く評価すべき独創性を備えていると認められるが、博士学位請求公開審査会において3人の論文審査委員により出された質問や問題点について主なものを記すこととする。

口頭諮問においては、1) 論文のオリジナリティ、2) 第2章の自己概念の整理の仕方とその意味付け、3) 全体仮説にあいまいな概念規定が含まれているなどの指摘があった。これらの指摘に対して、課題が残っているが、いろいろな指摘された課題に対し訂正することを含めて適切な応答と回答が得られ、課題については整理すると回答された。

よって、本論文は博士(教育学)学位(甲種)を授与するにふさわしいものと認めた。